

KU-AP NEWSLETTER

November 2016 vol.4



大学教育再生加速プログラム



More Active!

教育推進部長 経済学部教授 良永 康平

2016年10月より教育推進部長を命じられました良永(経済学部)です。関西大学の教育力をいっそう高めるべく、様々な工夫や仕組み作りを検討したいと思っています。

なかでも大きな課題となっているのがアクティブ・ラーニングです。日本の教育界も今やこのキーワードで溢れ、変革を求められています。これは簡単に言えば、従来の教員による一方的な講義形式とは異なり、学生の能動的、主体的な取り組みを取り入れた学習法、あるいは教授法のことです。これを取り入れることによって教育が単なる知識の伝授ではなく、学生自らが問題を発見し、議論や共同作業のなかから解答を見出し、主体的な成長を促すものになるとされています。

日本は、戦後経済を支えた製造業を中心とした「工業化社会」から、いかに付加価値の高いサービスを生み出すかが重要な「知識基盤社会」に移行しつつあり、これを背景として新たな教育が求められていることは確かであり、それが産業界からの要求でもあります。単に知識や技能を身につけただけでは社会であまり役立たなくなりつつあり、主体的に学習に取り組むなかで身につく思考力や判断力、表現力等こそが社会で生き抜く力となっているのです。そこで次世代を担う若者

を教育する大学にも、教育の変革が求められています。

もちろんすべての講義をアクティブ化しなければならないということではありません。そのようなことはそもそも不可能ですし、従来型の講義(いわばパッシブ・ラーニング)をすべて過去の遺物として葬り去ることは適当ではありません。全く未知の学問分野を学ぶ際には、パッシブはパッシブなりの良い点もあるのです。ただ大学教育においてパッシブのままでは不完全であり、どこかでアクティブに転換する必要があります。それを従来担ってきたのはゼミ(演習)です。主に文系学生はこれまで、ゼミでの主体的で積極的な取り組みを通して、社会で生き抜く力を育んで卒業してきました。したがって今後検討すべきなのは、ゼミ以外のどのような講義のどの部分をアクティブ化できるのか、どのような形にアクティブ化させるかといったことなのでしょう。

すでに関西大学では教育推進部で、専門家による検討と模索が始まっています。岩崎千晶編『大学生の学びを育む学習環境のデザイン』(関西大学出版部)には、学内での様々なアクティブ・ラーニングの取り組みが紹介されています。さらなる試行と展開を期待し、支援したいと思います。

部会からの報告/The DOTS部会

「The DOTS部会」では、考動力育成のための正課及び正課外プログラムを検討します。

具体的には、①交渉学科目やクリティカルシンキング科目の開設及び運営、②交渉学ワークショップの企画・実施、③アクティブ・ラーニング型授業を行う教員の育成（セミナー・ワークショップの実施、教材開発など）を中心に行います。

第5回交渉学ワークショップを開催しました

6月18日、第5回交渉学ワークショップを行いました。前半、後半の二部構成で行いました。

前半の部では、「Win-Winの関係づくりの身体化」と題して、LA（ラーニング・アシスタント）や交渉学・クリティカルシンキングを学ぶ学生たちが、自分たちの学びの成果をミニセッション形式で交渉学を学ぶ他の学生・社会人たちに交渉学についての学びの経験を共有しました。

後半の部では、交渉学学生リーダーのための研修「Win-Win 関係づくりの追求」

と題して、交渉学リーダーをめざす学生たち、交渉学教材コンテンツに関心のある学生、一般社会人を対象にフレームワークを

使った交渉学コンテンツの作成から活用までをグループワーク形式で行いました。

（教育推進部 山本敏幸）



IBM本社にてIBM社員と学生が「交渉学ワークショップ」を開催しました

8月5日、東京都・箱崎にある日本アイ・ビー・エム株式会社（日本 IBM）の本社において、本学のLAとして活躍する学生を中心に、追手門学院大学と東京富士大学の学生を交えて、日本 IBM 社員と交渉学の合同研修を行いました。

研修では、日本 IBM アナリティクス事業本部技術統括部長の大塚知彦氏を講師に、「交渉学の入り口：日頃見落としがちな気づきから」をテーマとしたプログラムを社員の方々と合同で実施しました。レシートを見比

べるセッションでは、相手が発信している情報の意図するところ、背景情報をいかにくみ取り、Win-Win の交渉に到達するかという交渉学のポイントを社会人と学生の混合チームのグループディスカッション・全体共有のワークショップ形式で学びを深めました。その後、日本 IBM の歴史や IT の変遷について、社内見学を通して学びました。

参加した学生たちは、ビジネスの第一線で活躍する社員の方々と議論を行い、今までとは違った視点から交渉学について考え

るきっかけとなりました。

（教育推進部 山本敏幸）



レシートを見比べるワークでは、今まで何気なく受け取っていたレシートに店の想いが詰まっていることを知りました。ただ違いを見つけるだけでなく、「なぜ違いが生まれたのか」を考えることで気づくことが多々ありました。これからも自分の身の回りに興味を持ち、疑問を持つことを大切にしたいと思います。研修後、日本IBMの社内を見学させていただきました。伝統を大切にしながら、新しいものに挑戦されていることが空間から伝わってきました。社会人の方と交流できる機会はなかなかないので貴重な体験になりました。

（LA 政策創造学部4年 松田昇子）

東京センターにて「交渉学ワークショップ」を開催しました

8月6日、東京センターにて「交渉学ワークショップ」を開催しました。社会人も参加して学生主導で行うワークショップは昨年に続き、2 回目の開催になります。昨年同様、会場は交渉学を学ぶ人たちの熱気に包まれました。

午前の部では、ポスターによる大学でのアクティブ・ラーニングの取組について学生目線で情報共有を行いました。本学のLAとして活躍する学生、追手門学院大学の学生、東京富士大学の学生、神戸親和女子大学の学生がこれまでに取り組

ってきた学習活動を共有しました。プレゼン方法も様々で、漫才形式や演劇風にアピールするなど、ポスター担当者の個性があふれたセッションになりました。

午後の部は、「関大×交渉学の現状報告」から開始しました。学生による「もともとといういぬのきびだんごを巡る交渉ケース」などを通して、交渉の場で個人のもつ背景をしっかりと考えることの重要性を学びました。参加した学生と社会人が意見を交わし合う中で、互いの視点の違いに気付くなどとても刺激ある時間になり

ました。

（教育推進部 山本敏幸）



部会からの報告／教育・学修成果部会(TLA部会)

「教育・学修成果部会(TLA部会)」では、学修成果の可視化に向けた評価指標の開発や間接調査・直接調査を検討します。具体的には、①学修行動・到達度調査の項目検討・実施・分析、②コモンルーブリック開発及び開発に向けた調査、③学修コンシェルジュ育成のためのSD研修を中心に行います。

2016年度学修コンシェルジュ育成プログラムを実施しました

日時：9月6日(火) 10:00～12:00 場所：千里山キャンパス第2学舎2号館 C301教室

9月6日(火)に、千里山キャンパスにおいて、学修コンシェルジュ育成プログラムを実施しました。この取組は、教務系職員の学修支援者としての能力向上を目的として、昨年度から実施されているものです。本学において、日常的に教務系の学生対応を行っているのは、学事局教務事務グループの職員です。今年度は、昨年度に受講していない教務事務グループ職員に加え、専門職大学院事務グループや授業支援グループ職員からも参加があり、計16名で実施されました。

参加者は、研修参加前に動画閲覧とその内容に関する質問に回答しました。動画では、学生からの相談に職員が対応するケースが映し出されており、自分自身がその職員の立場になったとき、どのように対応するのか、どのような結果が望ましいか等を各自で

考えました。

研修当日は、本学教育推進部森朋子教授による趣旨説明の後、動画のようなケースへの対応について、実際にどのように対応するのがよいかをグループで議論しました。グループでの議論ののち、発表による全体共有が行われました。議論の合間には、適宜振り返りの時間を設け、参加者それぞれが得た新たな気づきをまとめました。

最後に、土橋良一大学本部付局長から、「学生自身で判断できる支援をすることが重要」など、学生対応におけるポイントについて解説があり、教務系職員としての熟達者の考えや態度を学ぶ機会となりました。参加者からは「自分1人の見解や知識では見落としがちな点が多かった」「学生の人生の選択肢を増やしてあげるため

にも、知識を増やし、親身に相談にのりたい」といった感想がありました。

今回は、人事課からも見学者があり、プログラムのあり方について意見交換もできました。今後も、プログラムのさらなる体系化を視野に入れ、内容の改善を継続的に検討していく予定です。

(授業支援グループ 竹中喜一)



アクティブ・ラーニングセミナーを開催しました

平成28年6月27日(月)の夕方より、関西大学千里山キャンパス第2学舎にてアクティブ・ラーニングセミナー「21世紀を生き抜く『新しい能力』を育む教育とその評価」を開催しました。関西大学では大学に限らず、小学校から大学までの一体化改革の中で、特に次期学習指導要領の目玉となる深い学び「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」を初・中等教育においても推進しています。その活動の中で今回のテーマは、アクティブ・ラーニングの評価方法に着目しまし

た。講演者として、アクティブ・ラーニングの学習成果の評価に関して第一人者である松下佳代先生(京都大学高等教育研究推進開発センター教授)と関西大学初等部においてミューズ教育導入という組織的な改革に携わった黒上晴夫先生(関西大学総合情報学部教授)をお迎えし、松下先生には「『新しい能力』について」、そして黒上先生には「ミューズ学習の思考力について」と題し、それぞれ話題提供いただきました。その中で、学習理論についてや、また次期学習指導

要領の内容など、理論と現実を往還させるものが多く、フロアからも高い評価をいただきました。その後、本学教育推進部の森をファシリテータとし、3名で今後のアクティブ・ラーニングの評価を含む改革の方向性や、特に2020年に導入される予定である新テスト等の内容について意見交換をしました。当日は関西地区を中心に、中高および大学関係者が100名集い、今後の教育改革の流れについていろいろな思いを想起させた3時間となりました。

(教育推進部 森 朋子)

入学時調査の報告を行いました

6月～9月の期間、各教員に「入学時調査2016」の結果報告を行いました。報告を希望した11学部の教授会・執行部会にて、結果の概要を説明しました。

入学時調査では、高校での学習経験、大学や学部に対する満足度、大学で最もやりたいこと、進路の希望、コンピテンシーやリテラシーなど、入学した学生がどのような学生たちであるのかを多角的に把握できるように設計しています。これらの結果を可視化した資料を学部ごとに作成し、学部として特徴で

あろう内容を説明しました。また、入学時調査は本格実施の2年目を迎え、今年度は2015年度の調査結果との比較が可能なように資料を作成しました。

短い時間での報告でしたが、各教員は報告資料に興味深く見て、結果に関しての質問や意見、さらなる詳細な分析の要望をすることもありました。学生にはポスターの形式で結果を伝えていますが、教員においても入学時調査の結果を共有して、入学した学生たちの現状を知り、教育について改めて考える

契機となったのではないかと考えています。

入学時点での調査は、大学生活のスタート時点での把握です。学修成果を得ることを期待して入学してきた学生たちが、どのように大学で学び、成長したかを知るためのベースともなります。この観点を大切に、次年度も入学時調査の実施を予定しています。そして、教学への活用のために精査できるように、今後も報告や資料をとりまとめていくことを推進していきます。

(教育推進部 紺田広明)

新任教員紹介



紺田 広明

(教育推進部 特別任命助教)

4月より教育推進部の特別任命助教として着任いたしました、紺田広明と申します。

これまで心理統計法や行動計量学の分野にて研究を行ってまいりました。現職では、教育・学修成果の可視化に向け、学修行動調査・到達度調査の調査票作成やデータの分析・可視化などのIR (Institutional Research) を担当させて頂いております。教学への活用につながるように、根拠となるデータを提供していきたいと考えております。大学教育の領域は、私にとって新しい挑戦ですが、教育や学生の力を再認識し、教職員の皆様のご協力を日々頂きまして、活動しております。誠に僥倖ではありますが、関西大学に微力ながら貢献していく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。



千葉 美保子

(教育推進部 特別任命助教)

9月より教育推進部の特別任命助教として着任いたしました、千葉美保子と申します。

これまで専門職としてラーニングコモンズや学習支援、ワークショップなど学習環境の整備に関する実践および調査研究を行ってまいりました。現職では、学生の学修成果の可視化に向け、評価基準表であるルーブリックの作成や活用の支援を担当しております。

本事業を通じて、本学がより学生の自律的な学び舎となるよう、教職員のみならずのお力をお借りしながら、微力ながら努めてまいります。

先生方の授業内での先進的な取組や、日々のお悩みなど、ぜひお話を聞かせてください。どこへでも馳せ参じます!どうぞよろしくお願い申し上げます。

名桜大学の学習支援はすごい!!

2016年10月21日、名桜大学を視察訪問しました。名桜大学は学習支援センターとして、言語学習センター(Language Learning Center: LLC)、数理学習センター(MSLC)、およびライティングセンター(MWC)の3つの施設を設置していますが、今回は2001年に開設され、学習支援の歴史が長い言語学習センターの取り組みについて報告します。言語学習センターの理念は、外国語が通じたら楽しいという感覚を学生にもってもらい、留学生やチューターと楽しく友達を増やすことや、物事や人に積極的にしかかわることができる力を伸ばすことです。また、学習支援を行うチューター自身の能力が上がることも

も期待されています。

学部生であるチューターは学生からの外国語学習に関する質問や会話等に対応しています。チューターには学習支援以外の仕事もあり、それぞれ役割分担をして実施しています。たとえば、書籍担当は書籍購入におけるリクエストを整理し、広報であればチューターの募集時に募集のポスターやWebページの作成を行っています。環境整備担当は、センターの学習環境を整え、学生がセンターに入りやすい雰囲気を作り出すために、例えばハロウィンの時期であれば、それにまつわる季節の制作物を飾るなどの活動を行っています。

チューターを育てるために、毎週木曜日5限にLLCミーティングがあり、センター長、副センター長、専任講師の3名とチュータリングで問題があった事例について話し合いがなされています。そのほかにも、①16個のトレーニングプログラムをマスターする。②25時間のチュータリングを行う。③チューターの研修としてプロジェクト学習を展開し、成果をCRLAに報告する。④自己評価、教員評価を行っています。非常にきめ細かな研修制度を整え、質の高い学習支援を提供している様子がうかがえました。

(教育推進部 岩崎千晶)

事務局より

本取組が稼働して2年が経過したのと同じく、私が事務補佐員として携わり同じ時が過ぎました。担当している業務の一つとして、教職員や学生を対象としたワークショップやシンポジウムなど、イベントに関する広報物の大体を内製しています。また、これらをWebサイトへ掲載し、イベント当日の運営を陰ながら補佐しています。

広報用のポスターを作成する際には、企画の意図を、誰に対して、分かりやすく伝えるかという点を

重視しています。その際、デザインに必要なフォントや写真などの限られた資源を活用して、一定の品質に仕上げることに苦心します。反面、企画者である教職員と顔を合わせて紙面を確認することができるため、紙面に表す要素の優先順位を把握できる点は非常に助かります。

作成後、当日にシンポジウムやワークショップを聴講して振り返ることがあります。「はたしてポスターが広報物として機能しただろうか」。一番の心

配事は参加してほしい対象者に一人でも多く足を運んでもらえたか、という点です。これについては、参加者が記入した事後アンケート結果から若干読み解くことができます。

現在、ルーブリック普及のための印刷物に着手しています。教員と学生の双方がルーブリックに関する知識を深め、具体的に活用できるように工夫を凝らした内容となっています。完成をぜひご期待ください。(土)



KANSAI UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514

E-mail: ap-info@ml.kandai.jp

教育開発支援センター <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html>

AP取組 Web サイト <http://www.kansai-u.ac.jp/ap/index.html>

発行日/2016年11月 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター